

病変を有する2例において1例のCR, 1例のPRの効果を得られた。副作用は1例においてGrade4の骨髄抑制, 3例においてGrade3の脱毛を認めたが, 下痢等の副作用は軽度であった。現在観察期間8~18カ月で, 2例は無病生存中, 1例は担癌生存中である。今後観察期間の延長, 症例の追加により, 本レジメンの卵巣明細胞腺癌に対する有効性をさらに検討する予定である。

7) 婦人科悪性腫瘍手術における腸切除症例の予後とQOLに関する検討

関根 正幸・青野 一則
東條 義弥・花岡 仁一 (新潟市民病院)
竹内 裕・徳永 昭輝 (産婦人科)

【目的】婦人科悪性腫瘍手術において腫瘍の腸管浸潤を認めた場合, 腸管の合併切除を施行するか否かの決断は非常に難しい。そこで我々は, 当科における初回手術時の腸切除症例において検討を行った。【方法】婦人科悪性腫瘍手術症例5例(卵巣癌3例, 子宮体癌1例, 子宮肉腫1例)について, 化学療法の遂行度, 術後合併症, 食事摂取状況, 在宅期間, PSの推移, 予後につき検討を行った。人工肛門造設が3例, 端々吻合が2例であった。【成績】4例は約1年の経過で死亡, 1例は担癌中であるが3年5ヶ月生存中である。腸切除のため目的化学療法が施行できなかった症例はなかった。術後, 排尿障害を1例, イレウスを1例に認めた。食事摂取, 在宅期間からみたQOLは全ての症例で良好であった。手術の影響によると考えられるPSの低下を認めたのは1例であった。【結論】当科における各症例の検討により問題提起をしたいと考えている。今後SLOでの腸切除症例も含めた検討をしたい。

8) 当科で取り扱った若年子宮体癌9症例の臨床的検討

笹川 基・松下 宏
菊池真理子・遠藤 道仁 (県立がんセンター)
本間 滋・高橋 威 (新潟病院産婦人科)

子宮体癌は比較的高齢者に発生することが多く, 40歳以下の若年者での発生は稀だが, 若年体癌では妊孕性温存が望まれることもあり, その取り扱いには細心の注意を要する。昭和57年から15年間に当科で取り扱った若年子宮体癌9例を臨床的に検討し, 以下の成績が得られた。

- 1) 若年体癌は全体癌中3.9%を占めていた。
- 2) 8例が未産婦であり, 月経周期は7例で不整であった。主訴は不正性器出血が多かった。
- 3) 術後病理検査では, 9例すべて類内膜癌であり, 高分化型腺癌8例, 中分化型腺癌1例であった。全例で子宮筋層浸潤がみられたが, 1/2を越える浸潤は1例だけであった。リンパ節転移は1例のみみられた。手術進行期分類はIb期7例, IIIa期1例, IIIc期1例である。
- 4) インフォームドコンセントの結果, 子宮を温存した症例はなく, 全例に子宮摘出術などを行い, 5例に術後化学療法, 4例にホルモン療法を行った。全例無病生存の状態である。

若年体癌はホルモン異常を背景に発生することが多いと考えられ, 予後良好な傾向が認められた。今回の症例中には, 高分化型腺癌で画像診断では子宮筋層浸潤の所見はなく, 子宮温存も可能と考えられたが, 摘出標本で筋層浸潤が認められた症例がある。子宮温存療法の選択には慎重な判断が必要と思われた。

9) 前立腺癌に伴う γ Sm/PSAの変化

西山 勉・照沼 正博 (長岡中央総合病院)
泌尿器科

【緒言】前立腺癌(CAP)治療に伴う前立腺特異抗原(PSA)の変化の観察は重要である。非結合型PSA比率がCAP早期発見に有用であるとの報告が散見される。 γ Smは非結合型PSAを測定しているとされる。【方法】CAPの内分泌療法に伴うPSAの変化を γ Sm/PSA比率で検討した。【結果】治療開始症例では治療開始前と2週間後と比較すると, 限局癌症例で有為な γ Sm/PSA比率の上昇を認めた。転移症例は限局癌症例に比較してその上昇は軽度であった。組織分化度が高いほどその上昇は高度であった。抗アンドロゲン除去症候群発現症例でもPSA低下に伴って γ Sm/PSA比率の上昇を認めたが, デキサメサゾン有効症例では一定の傾向を認めなかった。再燃症例ではPSA上昇に伴って γ Sm/PSA比率の低下を認めた。【結語】治療に伴う γ Sm/PSA比率の変化はCAPの治療に対する反応性の指標になりうると考えられた。